平成15年4月20日発行

旭川市

井上靖記念館報

第3号

協賛：井上靖記念文化財団

十周年に寄せて

旭川市井上靖記念館相談役
浦城　いくよ

今年は旭川に「井上靖記念館」ができて、十年になります。平成五年七月二十四日、井上靖記念館のオープンの日に、当時の坂東徹市長、母井上ふみ、ミス旭川の二人のお嬢さんたちと開通したばかりの「井上靖通り」八百三十メートルを長い列の先頭にたって記念館に向かって歩いたときの、何ともいえないすがすがしい気持ちを思い出します。

この道路は、靖の生まれた官舎があった春光地区に旧陸軍兵舎の火災を防ぐ境界道路として残っていたものを市と春光西地区市民委員会によって整備されたと聞いています。道幅が広くて、四季それぞれの木が植えられていて、いつ歩いても気持ちがよく、また近年は幹も大きくなり、通りにも貫禄が備わってきました。せせらぎや築山で子供たちが楽しく遊んだり、大人が寛いだりできる道路など全国そうザラにはないでしょう。

井上靖通り開通式

素晴らしい道路に井上靖の名前を付けていただいたと感謝し、自慢にも思っています。

「僕が生まれたのはどんな所か行ってみようよ」と母を誘って、父が出かけたときの様子が目に浮かび、私は母がレリーフに書いた「靖と旭川」が大好きです。「その頃は、もう雪が降っていて、街路樹のナナカマドの赤い実は雪を被って美しかった。」と書いています。平成八年、この道路は開発局から「郷土賞」をいただいたと聞いています。

開館記念植樹

開館式の日、玄関わきに母とともに植樹したナナカマドの樹も、年月を思わせてくれています。母は祝辞のなかで「靖は晴れ男でございまして、世界中どこへ行ってもお天気でした。」と挨拶をしました。父は稀にみる運の強い人でした。平成二年九月二十日、旭川大雪アリーナで開かれた旭川市開基一〇〇年の式典に招かれて、自作の詩　―私は十七歳のこの町で生まれ、いま百歳のこの町を歩いている―を読みあげました。

前日、旭川信用金庫前の通りにこの詩碑が中井延也氏のデザインにより建立され、除幕式が行われました。夜は「私の孔子」と題してパレスホテルで講演をしました。食道癌の影響で、この頃はだいぶ身体が弱っていましたので私は両親に付き添って行きました。生誕地旭川への旅が父の最後の旅となりました。この四ケ月後に亡くなりましたが、本当に体力の限界ギリギリのときの旭川への旅でした。その父も今年の一月二十九日には十三回忌をむかえました。

私は、この十年間、たくさんの行事に関わらせていただきました。中国の人民対外友好協会のお客様をナナカマドの会の皆様がお茶会を催して迎えて下さったり、昔から父と親しかった野鳥の会の高野昭氏の「海峡」についてのお話やNHKのシルクロード番組の時、父と一緒に敦煌へ行った写真家の大塚清吾氏がシルクロードでの父をあたたかく語ってくださった。思い出せば、まだまだきりがありません。五周年には椎名誠氏の「凍った大陸・砂の海」―井上靖文学の舞台を歩いてきて―と題した特別講演会が開かれました。大勢の聴衆を集められる方を紹介して欲しいというのが注文でした。いずれの先生方も父をよく知っていて、愛情をもって話をしてくださった。その時々一生懸命考えたり、お願いしたり、心配したりしましたが、次に述べる写真展に比べたらたいしたことではありませんでした。

私の関わった行事の中で一番努力をし、思い出深いものは、平成十一年十月に開催された「井上靖の撮った写真展」です。ご覧いただいた方も多いと思いますが、父は昭和四十八年五月から一ケ月間アフガニスタン、イラン、イラク、トルコを旅行し、その時撮った写真を毎日新聞から「草原の旅・ゴビの旅」として出版しています。滋賀県の高月町立「井上靖記

文学碑除幕式

念館」が保存の悪いネガを苦労して引き伸ばせるだけ伸ばしてイラン、アフガニスタンの写真展を開催されました。

「写真は無料で貸してあげます、送料だけ払ってくだされば結構です。他の井上記念館に回して展示しては如何ですか。」との申し出に私は願ってもないことと思いました。まず、旭川の行事に如何ですかと伝えました。でも、それからが大変なことでした。「場所がない」というのがお答えでした。とにかく「展示をしてみようかな」と館長さんにまず思っていただかなければなりません。機会あるごとに「隣の彫刻美術館は借りられませんか。費用もかかりません。出来ているのを借りるのですから手間もかかりません。写真なので、運搬も簡単ですし、もし失くなってもネガがあります。」と申しました。教育長さんにも相談役会の時などに話してみました。実現までに四年はかかったと思います。今、再び来館者の感想文を読んでみると、トルコやイラン、ヨルダン、中国などへ旅をされている方が意外に多く見に来られているのには驚きました。作家の目を通した写真展は珍しく、また開催してほしい。じっくり見るには静かでこの場所はとてもよかった等書かれています。新聞にも取り上げられ、沢山の入場者がありました。館長さんはじめ沢山の方々のお力により開催されたものでした。

十年間の間には館長さんも三代目となりました。職員も開館当時のメンバーは全員替わってしまわれました。最初から長い間お世話になり、温かく見守って下さっていた後藤教育長さんまでが退職された時には淋しい思いもしました。でもナナカマドの会の皆さまの変わらないお顔に接した時、入れて下さったコーヒーやジュースをさわやかな風景に囲まれたサロンで飲む時のうれしさは何にも勝るものです。全国各地にある井上靖関連館を通して世の中の仕組みを勉強させていただいた十年間でした。

井上靖記念館が出来てもう十年。毎年旭川に行くたびに、少しづつ何かが変わっています。変わらないものがあるとすれば、父の言ったように、それは雪をかぶったナナカマドの赤い実なのかもしれません。

父は「一座建立」というお茶の言葉が好きでした。

―その時、居合わせた一座の者たちが心を触れ合わせて造り上げる密度の濃い世界―

お神輿に例えてよく私たちに言っていました。「神輿を担ぐにも、一番重い所を一生懸命担ぐ人もいれば、軽い所を担ぐ人もいる。お酒だけを飲みに来た人もいれば、棒にぶら下がる人さえいる。でもこれはみんな必要な人たちなんだよ」

これからもまた一座建立で皆で知恵を出し合って、よりよい井上靖記念館になるように私もまた及ばずながらお手伝いをさせて頂くつもりでおります。

（井上靖の長女）

自主事業の概要報告

◆文学講演会

内　容　「井上靖『孔子』と『論語』に見える孔子像」

と　き　平成十四年五月十八日（土）

ところ　井上靖記念館

講　師　宮本　勝氏

（北海道教育大学旭川校教授）

【講演内容】

「論語」は弟子のメモが中心、小説は放浪亡命時代を中心に描かれている。井上靖著「孔子」「負函の日没―孔子―取材行」と孔子「論語」に出てくる表現を用いながら、七つの項目に分けて、孔子の生き方、考え方を講演。

一　はじめに―学と思と―

●学びて思わざれば即ち罔し。思いて学ばざれば即ち殆し。

（何でも考えなければ『ものごと』ははっきりしない。考えても学ばなければ『独断に陥って』危険である。）

二　放浪亡命の旅

孔子の誕生から青年期・壮年期時代に中都の宰（首都の市長）に抜擢され五十五歳・三桓（魯の三公族）の勢力を抑えようとして失敗し、魯を去る。放浪亡命時代の十三年間の苦難。晩年は門人教育、詩・書・礼・楽の整理。「春秋」執筆後に死去

三　小説「孔子」の構想―負函―

四　仁―葉公（負函の長官）の会見―仁とは、すべての人間が倖せに生きてゆくための、人間の人間に対する考え方。

五　孔子の人間としての魅力

六　信念の人―天命―

七　香りの人などを講演、最後に小説の語り手がありし日の孔子のことを偲び、負函の町を歩き、小説は終わっている。

◆ロビーコンサート

と　き　平成十四年六月二十二日（土）

ところ　井上靖記念館

演奏者　斉藤　治道氏（ギター）

渡辺　みゆき氏（ピアノ）

曲　目・ピアノソナタ第一二番ヘ長調K322　・荒城の月

・序奏とファンタンゴ他

新緑が美しい季節に素敵なコンサートが開かれました。大変多くの方々にお越しいただきピアノとギターの音色を楽しんでいただけたのではないでしょうか。あまり広くはないラウ

ンジの中で直接に伝わってくるギターとピアノの響きは、曲目の雰囲気を充分に私達に伝えてくれていたように思います。

今回は職員が替わって間もない頃の事業でもあり、館内でゆっくりと聴いていただけるための雰囲気作り等、手探りで進めていた気がしています。

◆文学散歩

とき　平成十四年七月十三日（土）
見学先　上富良野町、三浦綾子「泥流地帯」文学碑等
講師　東　延江氏
（北海道文学館評議委員）

十勝岳連峰の麓にある上富良野町は、晴れた日には雄大な山々が一望でき、また、町花ラベンダーを始め、色とりどりの花が咲き乱れる自然豊かな美しい町です。町の長い歴史の中で、何度かの十勝岳噴火により、人々は生活する場所を失ってきました。その様子を旭川出身の作家三浦綾子さんの作品「泥流地帯」に描かれています。

その文学碑が町の開拓記念館に建てられています。『「ドドーン」「ドドーン」大音響を山にこだましながら、見る間に山津波は眼下に押し迫り、三人の姿を呑み込んだ。』碑の一文は当時の恐ろしい町の様子を如実に表しています。

旭川からのバスの中では講師の東先生による三浦綾子文学碑、また近郊に建つ九条武子、長谷川零余子等の石碑の説明を聞き、人々の思いやその時々の様子を思い浮かべていたように思います。

最後に昼食をとった十勝岳展望台では真っ白な煙を吐く十勝岳の雄姿を見ることができ、平穏であることに感謝しつつ帰路に着きました。

◆ロビーコンサート

「井上靖の詩の世界と筝とのふれあい」

とき　平成十四年八月三日（土）
ところ　井上靖記念館
演奏者　猪狩　雅楽旭（いがりうたき）氏　ほか
曲目　・さくら21　・千鳥の曲
・春の海　ほか

演奏者七名の方々により記念館ラウンジにて演奏会が開かれました。普段接する機会の少ない筝、尺八の音色は大変新鮮で、その美しい響きは現代のものとは違う雰囲気をかもし出していたように思います。

井上靖が旭川を詠った詩「ナナカマドの赤い実のランプ」。これは雪を被ったナナカマドの実がランプにたとえられ、旭川市民の木「ナナカマド」の小さな実が細やかに美しく輝く様子や、北の寒さとそこに住むものの力強さが伝わってきます。その詩の朗読、そして最後に参加者の方々も含めて「雪の降る街を」を合唱。筝の演奏だけではなく、参加した方々も溶け合った演奏会は、温かな気持ちで終わりました。

◆文学講座①

【太宰治「斜陽」社会小説としてのテクスト】

一　鍵は直治にある
二　夕顔日誌の直治
三　不良ということ

とき　平成十四年九月七日（土）
ところ　井上靖記念館
講師　片山　晴夫氏
（北海道教育大学旭川校教授）

【講演内容】

『「斜陽」は何故今も多くの読者をつかんでいるのか。或いはどうして戦後文学の代表作と称されるのか。人気作家の太宰治が著作、発表した小説であるからか。はたまた趣向が秀れていて文章が魅力的であるからか。

私見によれば、鍵は直治にある。作品中に「夕顔日誌」（第三章）と「直治の遺書」（第七章）がなかったならば「斜陽」は今日まで読み継がれることはなかったであろう。』

講演では、片山先生によるこの様な書き出しから始まる資料をもとに、戦前・戦中・戦後と生きてきた直治の思いを学びました。直治自身の様々なものに対する怒り、物事の真理、真実、発言力の強い立場にある人達の社会に対するごまかし、たとえば戦地における敗北を「転進」、戦死を「玉砕」と呼んだ日本の指導者に対して「君たちはまだ懲りずに「ごまかし」を口にし、日本の多数の「人間」たちをマチガイに引きずりこもうとするのか」と直治は怒りと悲しみを抱えています。

また「生きている人間への愛」から始まり、またそこに帰ってくる学問、世の中の動きは自分の力ではどうにもならないと自暴自棄になった自分、自身の信条は青くさいと自覚しながら、直治は戦後の日本と日本人のあり方を痛烈に批判しています。

◆文学講座②

【井上靖「しろばんば」に表れた主人公の孤独】

とき　平成十四年十月五日（土）
ところ　井上靖記念館
講師　片山　晴夫氏
（北海道教育大学旭川校教授）

【講座内容】

「しろばんば」は井上靖の小学生時代を

描いた自伝風小説と呼ばれている作品で、しろばんばとは北海道でいう雪虫に似たもので、寒くなる季節に何処からともなく現れてくる小さな白い虫のことです。井上靖は五歳から一三歳まで養祖母のおかのさんと二人で暮らしており、その当時の出来事を主人公である洪作の目を通して描かれています。

少し複雑な家庭環境の中で、大人達は洪作への愛情の他にそれぞれに対する思い、思惑が存在し、洪作もどちらにつくとも言えない孤独な思いと、この複雑な環境に対する冷めた意識を持っています。ですが洪作の作中での印象がとても少年らしくまた全体がユーモア溢れているのは、作品の書き方、作者の視点に関係してきます。

◆**映画試写会**

とき　平成十四年十一月二十三日（土）
ところ　井上靖記念館
作　品　「おろしや国酔夢譚」
映画化　平成四年、監督　佐藤純彌
出　演　緒方拳、西田敏行ほか

【内　容】

「おろしや国酔夢譚」は江戸末期に実在した人物と、その数奇な運命を描いた作品です。大黒屋光太夫一行は、江戸に向かう途中、船は嵐に遭い、八ケ月もの間漂流し、彼らの漂着場所が当時女帝エカチェリーナ二世が統治していた大国ロシアのアムチトカ島という所でした。見た事も聞いた事も無い人々やその土地の言葉、町の様子に驚きながらも、日本へ帰る望みを捨てず、オホーツク、イルクーツクとシベリア大陸を横断していきます。そしてようやく女帝に拝謁がかない、約十年の月日を経て日本に帰る日を迎えますが、当時鎖国の時代だった日本で彼等は受け入れられず、幽閉されてしまいます。

映画は原作をもとに、漂流途中で亡くなっていった友への思い、寒さの厳しい土地での過酷な生活、発達した文化を持った都市の様子等が、壮大な映像の中で描かれていました。

今回の上映会は、本年、井上靖記念館が開館十周年を迎えるに当たり記念行事の予行として行ったもので、鑑賞後にアンケートを実施しました。今回は今までの自主事業とは異なり、開催時刻も遅く、また映像を観て頂くということで、みやすさ等館で検討しなければならない点も多く出てきました。井上靖の多くの映画化作品を皆様に御覧いただきたく思い、来年度は映画上映も含め、その内容をご紹介しようと考えております。多くの方のご来館をお待ちしております。

◆**読書会**

とき　第一回　平成十五年一月二十五日
　　第二回　平成十五年二月一日
ところ　井上靖記念館
作　品　「楼蘭」
講　師　秋岡　康晴氏
（旭川藤女子高等学校教諭）

【内　容】

今年度も二回にわたり読書会を行いました。この作品は紀元前に存在した小国「楼蘭」を描いた短編小説です。ロプ湖畔に広がる美しい町は、大国の漢、匈奴に挟まれ、どちらにも支配されるという苦渋の日々を送り、小国であることの苦しみを抱えていました。そして匈奴の劫掠から逃れるため、漢の庇護のもと、違う土地睦善に都を移すことになります。

しかし、都を取り戻したいという楼蘭人の思いは強く、それから数百年を経て睦善の王は立ち上がるのですが、そこにはロブ湖は無く、楼蘭の町も砂漠の中に埋もれている事を知ります。

読書会では、本を朗読する他にシルクロードのビデオや、秋岡先生がご旅行に行かれた時に購入なさった夜光杯等も見せていただき、当時の西域の様子を分かりやすく説明してくださいました。遠い昔その地に生きていた人々の生活や思いが伝わってくるようで、歴史の深さを感じさせる内容でした。

開館十周年「特別展示」の開催

平成十五年は開館十周年を記念して特別展示を開催します。開館当初からの課題でありました展示スペースの拡張を図るため、展示室の一部改修を行い、井上家をはじめ各関係機関・団体等の御協力をいただきながら、次のとおり「特別展示」を開催いたします。

特別展示1

「井上靖の未発表作品と新発見書簡」

・期間　平成十五年七月五日～九月十五日

・内容　①文壇登場前の無名時代に、冬木荒之介・岩嵯京丸・澤木信乃などのペンネームで書かれた「謎の女」「夜露」「就職圏外」他計十二点（神奈川近代文学館所蔵）の生原稿等の一部を展示します。

②平成十一年に、三重県熊野市で発見された書簡十二通（竹本ゆき子氏所蔵）は、井上靖が竹本辰夫氏に宛てた書簡で、文壇登場以前とその後の井上靖の心情を窺い知ることのできる貴重な資料であり、その内六点を展示します。

特別展示2

「井上靖の映画・舞台作品を見る」

・期間　平成十五年九月二十二日～十一月三日

・内容　①井上靖の作品の中で映画化・舞台化されたものは、映画三十九本、演劇二十六本と数多く、一人の作家の作品としては極めて稀であり、その中から主な作品二十七点の脚本・パンフレット・チラシ・プログラム等を展示します。
②期間中の毎週土曜日の夜「井上靖の世界＝サタデーナイトシアター＝」と題して、別途、「敦煌」・「おろしや国酔夢譚」等の上映会を開催します。

特別展示3
「詩人としての井上靖」
・期間　平成十五年十一月十一日～十二月二十八日
・内容　井上靖の作品には、詩も多くあり、詩を中核として小説が生まれているものがある。詩集等の展示を通して詩人としての井上靖を紹介します。

内部改修工事に伴う休館
・休館期間　平成十五年六月二十四日～六月二十九日
尚、この期間の前後の二十三日と三十日も月曜休館日にあたっています。
※七月～九月の間は、月曜日も開館しております。

読書会・未来へ向けて

秋岡康晴

井上靖記念館和室での昼下がりの読書会は至福の時間帯、私の一週間のサイクルの軸はいつしか土曜の一時半にセットされた。今後長く予想される老後の生き甲斐を与えてくださった旭川市に感謝、この気持ちは以心伝心、図らずも高齢者が多い会員達の思いでもある。

ところで、人口に膾炙され、新潮文庫本などの収録されている井上文学はせいぜい二十数冊、文豪といえども活字離れがすすむ昨今、絶版など入手しがたい作品も多く、個人的には全集に当たれるが、十数人の輪読会では全作品の鑑賞は無理である。それでも新潮、角川、講談社などの全文庫本を読破するのに十年近くの歳月を要する。その意味で読書会が発足して九年目にさしかかった平成十五年曲がりかどの時期を迎え、また『幼き日のこと』―旭川とも縁の深い自伝―『わが母の記』から新しい発見を求め再読してゆきたい。記念館には文庫本化されていない作品のコピーを十五部程度常時用意してくだされば幸いである。

思えばこの丸八年、輪読による原文主義を貫いてきた。フリートーキングで談論風発、時の経つのを忘れたことも懐かしい、その間の事情は記録ノートに克明に刻まれている。

沼津読書会のように事前に読み終え、テーマを設定してのディスカッションに臨む高度な方法もあろうが、旭川方式では文豪の言葉を逐一漢和辞典（『風濤』など）と照合させながら味わい、エッセイ、書簡までその全体像に迫りたい。

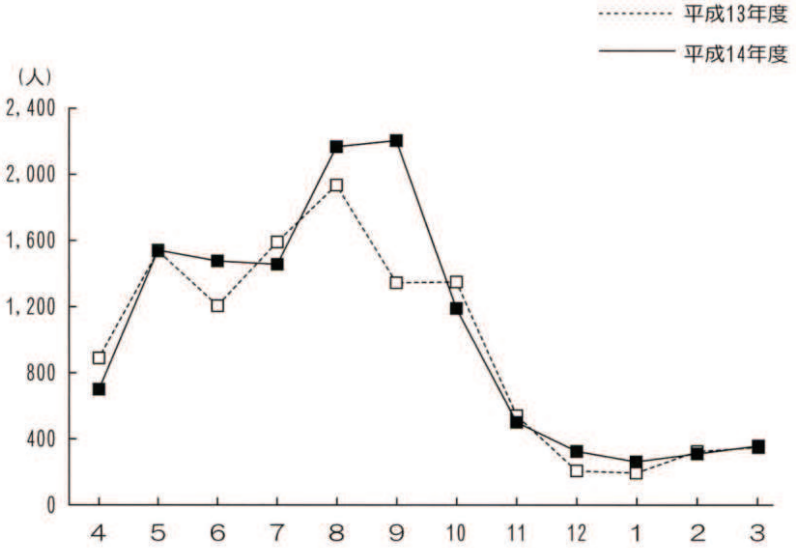
最近は楼蘭王国の王墓の壁画が発見されたという。まだ見ぬ楼蘭、井上靖が大阪毎日新聞記者時代に訪れた鬼ケ城（『渦』の詩の舞台）の追体験の旅、そして敦煌の莫高窟、鳴沙山、トルファンの葡萄棚、カシュガルの熱気に包まれた自由市場を会員の方々と再体験したい。

なお文豪が長女いくよさんに遺した寸言を引用する。

「これからは素人が物を書く時代だよ」（心交社発行『生命なりけり』・浦城いくよ「晩年の父・井上靖」より）

読書会一同この激励を肝に銘じたい。そして継続は力なりをモットーに地域に浸透してゆくなら、望外の喜びと言えよう。

入館者状況



春の井上靖記念館

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
平成13年度	888	1,534	1,204	1,589	1,936	1,342	1,347	540	206	193	323	348	11,450
平成14年度	699	1,539	1,474	1,454	2,168	2,202	1,188	500	324	261	309	357	12,475

一年間のあゆみ

五月十八日
文学講演会
演題　『孔子』と『論語』に見える孔子像
講師　宮本　勝氏

五月二十三日
第一回　井上靖記念館運営協議会
会場　旭川市彫刻美術館

六月一日
喫茶コーナー始まる

六月十二日～十四日
相談役会議
会場　井上靖記念館

六月二十二日
ロビーコンサート（ギターとピアノ）
演奏　斉藤　治道氏・渡辺　みゆき氏

七月十三日
文学散歩
見学先　上富良野町の文学碑他
講師　東　延江氏

八月三日
ロビーコンサート（箏の演奏）
演奏　猪狩　雅楽旭氏　ほか

九月七日
文学講座
第一回「斜陽」
第二回「しろばんば」
講師　片山　晴夫氏

九月二十九日
常陸宮殿下・妃殿下御来館

十月七日
展示室一部展示替作業

十月二十七日
喫茶コーナー終了

十一月十九日
第二回　井上靖記念館運営協議会
会場　旭川市彫刻美術館

十一月二十三日
映画試写会
「おろしや国酔夢譚」

一月二十五日・二月一日
読書会
作品　「楼蘭」を読む
講師　秋岡　康晴氏

運営協議会

ご利用マップ

交通のご案内

あさでんバス

旭川駅前発⑤番（所要時間25分）
１条７丁目発22、80番（所要時間25分）
いずれも４区１条１丁目下車（徒歩３分）
タクシー／旭川駅前から1,600円程度

〒070-0091　旭川市４区1条1丁目
Tel. 0166-51-1188 Fax. 0166-52-1740

開館時間／午前９時～午後５時
休 館 日／毎週月曜日
（７～９月は休館日なし）
（月曜日が祝日の場合は翌日）
年末年始
観 覧 料／無料

平成15年度　井上靖記念館事業計画

５月17日（土）	文学講演会	「孔子と論語－その２」
６月14日（土）	ロビーコンサート	
７月12日（土）	文学散歩	
８月２日（土）	ロビーコンサート	
９月６日（土）	第１回文学講座	
10月４日（土）	第２回文学講座	
１月31日（土）	第１回読書会	
２月７日（土）	第２回読書会	

詳しくは、後日、こうほう「旭川市民」またはチラシをご覧下さい。事業は全て無料です。

編集後記

▼館の周囲に花が植えられ、春光園の木々とともに、四季それぞれの風情が感じられます。

▼これまで、井上家を始め、多くの関係者の方々からご支援をいただき、今年開館十周年を迎えることができました。

▼今年は、館内の一部を改修し、特別企画展を催し、多くの人に井上文学を理解してもらえるよう創意工夫しながら職員一同努力したいと考えております。

▼今後とも、記念館へのご指導・ご協力をよろしくお願いいたします。

井上靖通り